

『ユ一。ジャニーズの性加害を告発して』 カウアン・オカモト

ジャニー喜多川氏から受けた性加害を実名顔出しで告発し、大きな山を動かした「彼」の書いた本。日系ブラジル人の両親を持ち、貧しく日本人社会のなかで孤立していたカウアンは、ジャスティン・ビーバーのようなアーティストになる夢を持った。「ずっと探していた、自分の居場所、そして熱中できるもの。それがステージの上にある」。夢を叶えるためにモデル事務所を通じて男闘呼組の岡田健一に熱唱する DVD を渡したところ、いきなり「あ。僕だよ。ジャニーだよ」と本人から電話がかかってくる。しかも、今日 Sexy Zone のライブがあるから今すぐ来いという話だ。なんとか会場に着くと、ジャニーさんは「ユ一、いける?」。なんといきなりライブで歌えというのだった。出番が終わると、「ご飯行こうか」。そのまま、タワーマンションの最上階の広い部屋に泊まることになる。その日は何もなかった。しかし、しばらくして「ぼくの番」が来るのだった…。

『虹色のチョーク 働く幸せを実現した町工場の奇跡』 小松成美

道枝駿佑主演、24時間テレビスペシャルドラマで再び話題に。「会社は、売上を上げるためだけに、利益を上げるためだけに、存在しているのではないと私は思っています。人は人に必要とされてこそ、幸せを感じられます。楽しい、遣り甲斐があると感じられる仕事があつてこそ、人は誇りを持てるのです。ここで働く皆が幸せを感じることができる、そんな会社にしていきたい。「人は仕事をすることで、人の役に立ちます。褒められて、必要とされるからこそ、生きている喜びを感じることができる。家や施設で保護されているだけでは、こうした喜びを感じることはできません」。日本理化学工業という会社をご存じでしょうか? チョークを作る会社で、ホタテの貝殻を原料にして粉が飛ばない「ダストレスチョーク」、ガラスやホワイトボードにカラフルな色で描くことができ濡れた布で簡単に消せる「キットパス」などのヒット商品で知られています。しかし、何よりその名前を有名にしたのは、従業員の7割が知的障がい者であり、『**日本でいちばん大切にしたい会社**』という本で紹介されたことでした。健常者が障害者に寄り添う「共生社会」ではなく「皆働社会」をめざすという、会社の取り組みを描きます。

『さよならごはんを今夜も君と』 汐見夏衛

『夜が明けたら、いちばんに君に会いに行く』『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』の著者最新作！夕食はいつもジャムパンとクリームパン。第一志望の高校に落ち、食事の時間も惜しんで塾で勉強をし、勉強はトップだが食べものの味がわからなくなってしまった小春は、不思議な食堂に出会う。お夜食処あさひ。学生ならワンコイン（¥500ではなく、なんと¥100！）で食べられる夜食専門店。ここで食事をする必要のある人の目にだけ映り、心と身体がこの店の料理を求めている、食べるべき人を呼ぶのだと、店主は言っていて笑うのだが…。

『落日』 ^{みなと} 湊かなえ

「殺したのは、妹、そして、両親」。北川景子主演、吉岡里帆ら豪華キャストで WOWOW にて連続ドラマ化！一度だけ作品がTVドラマ化されただけで、あとはずっと「恋愛ドラマの女王」と呼ばれた有名な脚本家のアシスタントのような仕事をしている真尋は、世界的な評価をされている新進気鋭の映画監督・長谷部香から新作の脚本についての相談を受ける。なぜまったく無名の自分なんか？実は香はピアニストである姉と幼稚園の同級生で、故郷が撮影されている真尋の作品を見て、真尋のことを姉だと勘違いしたのだった。用件は、故郷で起きた殺人事件「笹塚町一家殺害事件」を次の作品で取り上げたいと思っていて、その話を聞いたかったのだ。クリスマスイブの夜に、引き込みりの兄がアイドル志望の高3の妹を刺し殺したあと、家に火をつけて両親をも殺してしまった事件。地元ではたいへん話題になった事件ではあるが、十五年も前の事件で、すぐに犯人は逮捕され死刑判決も出ている。いまさらなぜと不思議に思う真尋だったが、香にとってはこの事件は特別なものだったのだ。香が幼稚園生で笹塚町のアパートで暮らしていたころ、夕飯後の「勉強の時間」で十問中三問以上にバツがつくなど、教育ママだった母親の課す要求に応えられないと、香はベランダに放り出されていた。雪がちらついて、外にいるのには寒すぎたある日の夕方、香は隣のベランダとの仕切り板の下から小さな手がのぞいているのに気づいた。仲間がいる。この子も自分と同じように、親を怒らせたりがっかりさせるようなことをして、外に出されているのだろう。合図をすると、返事が返ってきた。お互いの指先が触れ合った。手の甲にあたたかいものを感じた。香はその子が殺された妹・沙良ではないかと思っていたのだった。本当の彼女を世間に知らしめたいと思っていたのだ…。真実を知ることが、人にはるかな希望を与えてくれる。

『ラウリ・クースクを探して』 宮内悠介

バルト三国のいちばん北側、ソビエト連邦支配下のエストニアで黎明期のコンピュータに魅せられたラウリ・クースクの半生。2歳ごろからラウリは数字に異常な関心を示し、順番に数字を書き続けていけばゴキゲンな子どもだった。5歳の春に転機が訪れた。ソビエトの機械技師だった父親が勤め先の工場から壊れたコンピュータ（電子計算機）を家に持ち帰ったのだ。ラウリはBASICと呼ばれるプログラムに夢中になった。小学校はラウリにとって憂鬱なものだった。勉強についていけず、クラスを中心人物にいじめられもしたからだ。そんなラウリが人気者になる。情報科学の授業で皆が初めて触れるコンピュータを使ってたちまちゲームを作ってしまったからだ。モスクワの大学に行って、サイバネティクス研究所にも行けるだろうと先生にも期待されるようになる。モスクワで開催されたコンテストにラウリが作ったゲームを応募すると3位で、1位はラウリと同じ年のロシア人の少年・イヴァンだった。この子だったら。ラウリはイヴァンに会うことを切望する。イヴァンもそうだった。なんとレニングラードからわざわざ田舎の町までラウリに会いに来たのだった。タルトゥのロシア系の中学校に行こうと思っていたラウリに、自分もそこに行くことを約束する。「きみとだったら、きっとこの灰色の世界も色づくだろう」。二人は同じ中学に進学する。だがその翌年にはベルリンの壁が崩壊。エストニア全土を覆う対ソの革命の波に、二人は翻弄されていく…。

『可燃物』 米澤穂信

『満願』で初めてミステリランキング3冠を達成し、翌年も『王とサーカス』で3冠、そして『黒牢城』では史上初ミステリ4冠、直木賞、山本周五郎賞を総ナメにした米澤さんの待望の本命作は、異色の戦国ミステリだった『黒牢城』とはまったく違い、拍子抜けするくらいオーソドックスでシンプルなあざとさのないミステリです。事件が起き、刑事が捜査し、解決します。たとえば、スキー場で起こった殺人事件の見つからない尖った凶器の行方、深夜3時の交通事故で複数の目撃者が「赤信号突破」だと証言しているのに逮捕に踏み切らない理由など。表題作の「可燃物」は、可燃ゴミばかりを狙った連続放火事件が発生し、容疑者をマークし始めたたん、放火はピタリと止まってしまう。もう犯人は目的を達成したのか？…フェアな本格ミステリ短篇集です。模範的^{かつら}な菓子パンとカフェオレしか口にせず、部下にもそっけない葛警部がもう少し魅力的だったら、もっと夢中になれたのになというのは、個人の感想ですw

『さみしい夜にはペンを持て』 ^{こがふみたけ} 古賀史健

「長編詩であり、冒険絵本であり、あらゆる少年少女のハンドブックであり、文章を書くことがすっかり面白くなってしまふ魔法の本。こんな本は、世界中でもはじめてなんじゃないかな」（糸井重里）。「この夜は明ける。書けば、必ず」。夏休みの大ベストセラー！ あの名著『嫌われる勇氣』の著者が、いま苦しんでいる若者たちに向けて書いた本。うみのなか中学校にひとりだけしかいないタコのタコジローはクラスのいじられキャラだ。ある日、彼は学校前のバスを「無理だ」と降りられなくなってしまい、終点の公園まで行ってしまふ。そこで出会った大きなヤドカリのおじさんは、タコジローの悩みを聞いて、「書くこと」を勧めるのだった…。「この本がきっかけで、日記をつけはじめ、続けることで救われる人が、きっとたくさんいる」（内沼晋太郎）。

…このほかにも、待望の最新刊！

『3月のライオン 17』、

『ミステリと言う勿れ 12』、

『わたしの幸せな結婚 七』、

『赤ずきん、旅の途中で死体と出会う。』、

橋本環奈主演で NETFLIX 映画化！

昔ばなし×ミステリシリーズ最終巻！

『むかしむかしあるところに、

死体があってもめでたしめでたし。』、

『あの日見た花の名前を僕達はまだ知らない。』

の岡田麿里さんが自ら映画原作小説を執筆！

『アリスとテレスのまぼろし工場』、

宮部みゆきさん

『三島屋変調百物語九之続

青瓜不動』

などなどなど！

☆ジョジョ！ ドラゴンボール！ 北斗の拳！

ズキュウウン!!! マンガは世界の文化！ 共通言語！ 日本人なら知っておくべき教養として、日本の誇る3大神タイトルを図書館に入荷しました！ 自分では買わないけれど、読んでみたかったんだよというタイトルばかりではありませんか？

早い者勝ち！ まとめ借り大歓迎！ 図書館へ急げ！